

第64号

令和4年
11月1日

題字

植木 満
初代東進会会長

東進

発行所

土浦一高東進会
茨城県立土浦一高
進修同窓会東京支部

発行人

東進会会長 飯塚 哲哉

事務局 〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-4 砂防会館別館6階
宮崎法律事務所 気付 東進会事務局
TEL (FAX) 03-5421-5321
E-mail : toshinkaisecretary@gmail.com
ホームページ <https://to-shin-kai.jimdo.com/>



提供 青木 功 (フォトグラファー 昭和50年卒)

■ 2022年 (令和4年)

東進会通常総会のご報告

東進会・企画委員会

■ 『茨城県の中高一貫教育政策と

土浦一高附属中の教育』

中澤 斉 (土浦一高附属中学校校長

昭和56年卒)

■ 『高校生時代からの半世紀を振り返る!』

坂本 輝雄 (昭和50年卒)

■ 第24回アカンサスクラブ講演録

『言葉は人や社会に対して何ができるのか』

千葉 ともこ (平成9年卒)

■ リレー放談 (第14回)

『SYOの道』

梅澤 熙子 (昭和40年卒)

2022年(令和4年) 東進会通常総会の報告

今年の「東進会通常総会」は、例年通り6月に予定しておりました。しかし、新型コロナウイルス感染症の波が何度も繰り返される状況が続いていましたので、

会員の皆様の健康と安全を優先、昨年同様オンライン形式での開催とさせていただきますました。令和4年6月12日(日)午後1時30分から「通常総会」、引き続き恒例の吹奏楽部・応援指導部による演奏・演舞を今回は動画による紹介、そして母校の中澤校長先生による講演と盛り沢山の内容となりました。オンラインによる総会・講演会は3回目となりますが、濃密でリアルな懇親会や生演奏会とは一味違った雰囲気と、熱心に活動する母校の後輩の誇らしい姿を楽しんでいただけたかと思えます。当日の議事次第と参加状況・審議結果は以下の通りです。

【総会】

○会長挨拶

東進会会長 飯塚 哲哉

○来賓挨拶

土浦一高・附属中学校校長 中澤 斉様

進修同窓会会長 大野 金一様

○審議事項

議案1 2021年度決算報告

議案2 2022年度予算案

議案3 2022～2023年度

役員改選案

書面による議決権行使・及び委任状提出
賛成 95名、反対0名

オンライン参加

賛成24名 反対0名

合計 賛成 119名 反対0名

いずれも全会一致で原案通り承認されました。

なお、今回の役員改選での退任と新任は次の通りです。

副会長 退任 沼里征二様(昭和33年卒)

副会長 新任 幕内邦夫様(昭和43年卒)

副会長 新任 鈴木良治様(昭和45年卒)

事前の映像収録や準備にご協力いただきました中澤校長先生、生徒の皆様、関係者の皆様に紙面をお借りして感謝申し上げます。
東進会企画委員会

『茨城県の中高一貫教育政策と 土浦一高附属中の教育』

土浦一高・附属中学校校長 中澤 斉 (昭和56年卒)



令和3年4月、土浦一高に附属中学校が開校するという歴史的出来事がありました。茨城県が、この3年間で中高一貫教育校を一気に増設した経緯と、本校附属中の教育についてご紹介します。

昨今、高校教育を取り巻く環境は大きく変化しています。変化の第一は「生徒数の急激な減少」です。茨城県では、中学校卒業生数が、1989年の約5万人をピークに年々減少し、2018年に2万7454人、2030年には約2万2000人まで激減すると見込まれています。このことにより、地域を担う人材の育成に重要な役割を果たしてきた県立高校の小規模化が進むことから、県では2019年に「県立高等学校改革プラン」を策定し対策に乗り出しました。このプランでは、学校の再編等も含めて、多様な魅力ある学校、学科づくりなどの教育改革を行い、各高校を「選ばれる学校」にしようと考えています。

30年を見据えて、トップレベルの人財・リーダーを育て、様々な分野で活躍できる人材の育成を、県立学校が担う仕組みを考えました。その答が、中高一貫教育の拡充です。「県内各地域で中高一貫教育への高いニーズがみられる」ことも理由としてあります。そして、県内各地の中学生にとって「より通学しやすい場所に中高一貫教育校を設置し、地域課題の解決的な学びを通して、『地域の中の学校』における中心的な役割を担い、地域のリーダー、地域での学びをベースに世界に飛び立つ人材の育成を目指す」という方針が立てられました。

中高一貫教育校と一口に言いますが、実は、3つのタイプがあります。1つは、「土浦一高と附属中」のように、高校と附属中を設置する「併設型中高一貫教育校」、2つめは、中高を分けずに、6年間を一体的に扱う「中等教育学校」、3つめは、高校が地元の公立中学校と連携する「連携型中高一貫教育校」です。ここでは、併設型一貫校と中等教育校を中心に説明します。中高一貫教育校のメリットは様々ですが、一般的には、「高校受験がないため、中学3年生の時期に受験をあまり意識することなく余裕をもって日々を過ごすことができること」、「同じ仲間と長い期間一緒にいることで、関係も深まりやすく、自然に親友と呼べる仲間を作りやすい環境にあること」などが挙げられます。茨城県教育委員会が示している中高一貫教育校の考え方は、次の3点です。

変化の第二は、「社会の高度化」です。現代社会は、Society5.0の時代に移行したと言われています。Society5.0では、AI(人工知能)や、ビッグデータ、IoT(モノのインターネット)などにより、社会の在り方そのものが劇的に変化することが予想されます。そんな変化の加速が増している現代社会にあっては、将来を正確に予測することは困難です。そこで、これらの大きな変化に対応し、社会を動かせる人財、つまりリーダーを育成することが求められます。県は、20

(1)6年間の計画的・継続的な指導が可能である併設型中高一貫教育校及び中等教育学校を、県内各地域に設置する。
 (2)併設型中高一貫教育校及び中等教育学校においては、探究活動や国際教育、科学教育等に重点を置いた教育を展開し、豊かな人間性と起業家精神を兼ね備えた、地域のリーダーや世界へ飛び立つ人財を育成する。
 (3)併設型中学校及び中等教育学校の通学区域は、県内全域とする。

これらの考え方に沿って、図1のように、2020年に5校、2021年に土浦一高附属中を含む3校、2022年に

【茨城県立中高一貫校開校の経緯】

開校年度	校名
2020年以前	日立一高附属中、並木中等教育学校 古河中等教育学校、小瀬高(連携型)
2020年	太田一高附属中、鉾田一高附属中 鹿島高附属中、竜ヶ崎一高附属中 下館一高附属中
2021年	土浦一高附属中 、水戸一高附属中 勝田中等教育学校
2022年	水海道一高附属中、下妻一高附属中

計14校

図1

2校と計10校が次々に開校し、茨城県の中高一貫教育校の数は、東京の11校を抜いて、全国で最も多い14校となりました。

昨年開校した土浦一高附属中などには、共通の狙いがあります。それは、「豊かな人間性と起業家精神を兼ね備えた地域のリーダーや世界に飛び立つ人財を育てることです。」

ここで、土浦一高附属中が目指す教育について紹介します。土浦一高附属中では、「生徒が、将来的に、世界の舞台で活躍できる人として、成長できること」を目指します。そこで、附属中から土浦一高を通じた6年間の教育活動を、一貫した理念のもとで展開できるようにするため、「グローバル・ラーナーズ・プロジェクト」をスタートさせました。このプロジェクトの特徴的な取組を、「人と繋がる」、「知と繋がる」、「社会と繋がる」という3つのキーワードで説明します。

まず「人と繋がる」について、土浦一高附属中は、1学年2クラス(80人)と小規模なので、同世代との仲間と、身近な問題について話し合ったり、互いに学んだことを発表しあったりする機会を増やすため、水戸一高附属中の生徒との交流会を行っています。今後、状況に応じて、学習や探求、スポーツの分野などでも交流を深め、切磋琢磨できる仲間として、お互いをリス・ペクトしあう関係づくりに努めていきたいと考えています。また、土浦一高生との交流の機会を増やし、部活動も、一高生と繋がりながら実施しています。現在、附属中の部活動として、運動部は、陸上部、剣道部、軟式野球部、女子バスケット部、女子バレー部の5つ、

文化部は、英語部、美術部、科学部、合唱部、吹奏楽部の5つがあり、各部共、一高生と共に精力的に活動しています。

「知と繋がる」については、60分授業や、振り返りの時間を大切にします。特に、英語に力を入れており、英語によるコミュニケーション力をつけるために、「+English」という取組を実践しています。「+English」では、英語の授業に限らず、全ての教育活動で、英語に触れ、英語によるやりとりを意図的に取り入れます。例えば、数学で負の数の掛け算を学ぶ際に、掛け算を英語で何というのか確認したり、行事の振り返りを英語で行ったりするなど、様々な工夫を行っています。一つ一つの「+English」は小さいものですが、積み重ねの成果は大きなものになります。このような取組により、中学校卒業時には、全員が「英語検定準2級レベル」以上を取得できることを目指します。

「社会と繋がる」については、「探究学習」によって、地域の課題を発見し、その課題をチームで解決する協働的な力を身に付けさせたいと考えています。その際、実態を目で見て感じたり考えたりする力を大切にするためのフィールドワークを重視し、探求の手法を磨いていきます。

このようなプログラムで育つ附属中学生には、高校入学の際、入試がありません。入試に影響されず、自分たちの計画にし

たがって学習活動を進めることができず。80人の附属中学生は、クラス替えをしながら高校1年までの4年間を過ごし、高校2年に進級する際に、図2のように、高校からの入学生と混合でクラス編成をします。



図2

高校1年の段階で、160名の仲間が加わり、新たな人間関係づくりができることは、人間関係が固定しないという意味で、メリットだと考えています。つまり、附属中及び土浦一高では、高校入試のことを考えなくて済む附属中での豊かな3年間と、新しい仲間と学ぶ一高での凝縮した3年間を過ごすことで、6年間の充実した学校生活を送ることができま

す。このことが、市町村立中学校とも中等教育学校とも違う、併設型中高一貫教育校の大きな特徴であり、魅力だと考えています。

最後に、中高一貫教育校に対する県の施策としてとてもセンセーショナルだったのが、民間人校長の公募です。昨年度、2名の民間人校長が竜ヶ崎一と太田一で昇任し、今年度は、土浦一、水戸一、北海道一の3校に民間人の副校長が採用されました。この3名は、今年度1年間、副校長として学校教育について学び、来年度校長に昇任予定です。任期は、副校長として1年、校長として3年です。県では、公募に際し、「これまでのキャリアで培われたマネジメントノウハウを十分に発揮し、過去の事例にとらわれない新たな発想に基づき、新しい時代の学校のマネジメントと人材育成に期待し、今回公募により幅広く募集を行うことにした」としています。本校においても、来年度以降、新校長の下、新しい取組を期待したいと思います。

以上のような大きな教育改革の渦中にある土浦一高ですが、創立125年の伝統の上に、革新的な取組をプラスしながら成長・発展し、今後も全国のトップ校としての歩みが続けていくことを確信しております。同窓会の皆様には、今後とも温かいご支援とご協力をお願いして本稿を閉じます。

〈訃報〉掲載の連絡をいただいた方

宮本 英尚氏 (昭和41年卒)

3月15日逝去 74歳

大曾根 宏亮先生

9月8日逝去 89歳

『高校生時代からの 半世紀を振り返る!』

坂本 輝雄 (昭和50年卒)



2022年3月末日をもって大学院時代を含めて40年間勤務した東京歯科大学を定年退職しました。昨年、とある学会で受付をしていた高校時代の同級生であるHさんに偶然お会いし、その際に東進会の原稿を依頼され、一瞬躊躇しましたが、これもいろいろと過去を振り返る良い機会だと考え、お引き受けすることにしました。

高校時代

私が土浦一高に入学したのは昭和47年(1972年)ですので、今から50年前ということになります。文字通り半世紀、人生いろいろありました。よくよくここまでのどり着けたなあ、というのが現在の率直な心境です。私は龍ヶ崎市愛宕中学校出身ですので、関東鉄道竜ヶ崎線にのり、佐貫駅(現在は龍ヶ崎市駅に改名)から常磐線で土浦まで通学しました。当時は下り線が1時間に2本しか列車がなく、片道1時間半ほどかかりました。でも、常磐線で通学する仲間がす

ぐにでき、楽しく通うことができました。通学に往復3時間ほどかかりましたのでクラブ(部)には入部しませんでした。勉強以外の思い出としては、一高祭があげられます。これは、体育祭、合唱祭、仮装祭からなります。特に仮装祭ですが、みんなで知恵を出し合って、張りぼてや衣装を作成し、市内を練り歩くというものです。朝は始発で学校に行き授業前にも制作に没頭しました。また、当時(現在はわかりませんが)は修学旅行がなかった。2年生の時に生徒だけで企画運営し、日光でキャンプを行い、キャンプファイヤーの周りで友人たちと語り合ったのも良い思い出です。

高校卒業後は同窓会に3回行っただけで、なかなか同級生たちと交流する機会がありませんが、縁がありまして月に4日ほど土浦で仕事をする機会があり、3、4か月に1回程度ですが、茨城在住の友人たちと楽しいひと時を過ごしています。

大学時代

大学は父が歯科医で、兄弟は姉と妹ということ、あまり考えることもなく歯科大学を受験し、父が浪人を望まなかった。日本では1番古い(創立1890年)私立の東京歯科大学に入学しました。教養課程(第1・2学年)は千葉県市川市にあったので、6畳一間、共同トイレ、共同台所というところの下宿しました。(当然お風呂は銭湯です)。その当時は、コンビニやファミレスなども無かったので自炊生活でした。専門課程(第3〜6学年)は校舎および病院が水道橋にあり、

都内のワンルームマンションから通学しました。大学3年の時に大病を患い1年間休学しました。両親には大変心配をかけましたが、友人が2倍になり、何事にも無理せず、すっかり楽観主義者になつてしまいました。

医局員時代

大学卒業後の進路ですが、学生時代に歯科矯正学の授業で、不正咬合(乱れた歯列)が美しい歯列になり、しかも顔貌も劇的に変化する治療をみて、生来曲がったことが嫌いな性格なので(もちろん冗談です)、私もまっすぐな美しい歯列を作りたいという理由で、歯科矯正学講座への入局を決めました。矯正治療は高い専門性が要求され、学生時代の講義や実習程度では患者さんに治療を施すことは困難です。東京歯科大学の歯科矯正学講座には3年間の卒後研修課程があり(授業料あり)、毎日深夜(稀には朝方まで)まで、講義、患者さんの診断及び治療方針の策定、矯正装置の作成に追われます。研修課程終了後、後期研修を2年受け(給料は僅かですがあります)、臨床論文を作成し、6年目に公益社団法人日本矯正歯科学会の認定医取得を目指します。さらにその上の資格としては、指導医、臨床指導医(旧専門医)があります。

私は歯科矯正歯科学講座への入局と同時に大学院に進学しました。私が入局した昭和56年に口唇裂・口蓋裂を有する患者さんの矯正治療に健康保険が導入されました(2022年現在で先天異常に起因する59疾患の矯正治療に保険導入)。

裂隙の閉鎖手術の影響で著しい不正咬合が発現し咀嚼機能障害(よく噛めない)が生じるといのが保険導入の理由です。当時の主任教授から筋電図を用いて咀嚼機能障害を定量的に把握しなさいという研究テーマをいただきました。また、口唇裂・口蓋裂の治療は、出生時から成人まで複数の診療科の専門医によるチーム医療が必要となります。患者さんにとって矯正歯科医と最も多くの時間接します。口唇裂・口蓋裂の矯正治療は一般の矯正治療よりさらに高い専門性が要求され、私のライフワークとなりました。

大学院修了後、慶應義塾大学医学部形成外科学教室の非常勤講師となり、先天異常に起因する不正咬合の治療に取り込むことになりました。そこで出会ったのは「骨延長法」という治療法でした。これはロシアの整形外科医 Ilizarov によって開発された方法で、手足の延長に用いられていたものを、顎顔面領域に最初に応用したのがニューヨーク大学の形成外科医 McCarthy でした。骨延長法の開発により、外科的矯正治療(手術を伴う矯正治療)は劇的に変化しました。慶應の形成チームでも1994年から取り入れ、2001年に米国オクラホマ大学に留学した際に1週間ほどニューヨーク大学のオペ室に入り手術を見学させていただきました。蛇足ですが、当時NYに赴任していたO君と7月1日にWTCビルの屋上に上りました。皆様ご存じのように、9・11事件があった年で、帰国後ニュースで事件をリアルタイムで見て大変衝撃を覚えたのを思い出します。

その後講師となり、奉職した40年間で、400人近い認定医を育て、20人近くの大学院生の学位論文指導にかかりました。定年退職したあとは、東京歯科大学千葉歯科医療センターで臨床准教授として、慶應病院形成外科で非常勤講師として、後進の指導と臨床に当たっております。

さて、矯正治療に対する一般の方のイメージとしては、痛い、目立つ、高い、といったところでしょうか。矯正用材料(特に矯正用ワイヤー)の進歩により、痛みは劇的に軽減されました。矯正治療は歯にブラケットという金属製の装置を特殊な接着剤で接着し、それにワイヤーを固定し、ゴムやバネで力をかけ歯を動かすという治療です。約35年前にセラミック製のブラケットが開発され、大分審美性が向上しました。また、裏側にブラケットを装着する方法や、アライナー(透明のマウスピース)による方法(非適応症はありますが)も開発され、成人にとって矯正治療のハードルは下がり、最近では40代、50代の患者もとても増えています。最後に料金の問題ですが、矯正治療は自分自身の歯を動かし、審美的にも機能的にも改善するQOLを高める治療です。口腔内環境を整えることで、一生歯を失うことがないようにすることが目的となります。日本歯科医師会では『8020運動』を推進しています。80歳で20本歯を残そうという運動です。歯を失うと当然咀嚼(咬む)効率は落ちます。食べ物を噛むと記憶を司る海馬の血流量が増えることがわかっています。

また、歯は歯槽骨と歯根膜繊維で結合しており、噛むことによつて歯根膜が刺激され脳にもその刺激が伝わります。すなわち健康な歯が数多く存在すると認知症を防ぐことにもつながるわけです。人生百年時代と言われて久しいですが、矯正治療は健康寿命に少なからず貢献していると思います。歯並びが悪いことは病気ではありません(そのため健康保険の対象となりません)が、矯正治療を受けることで得られるメリットと治療費を勘案して治療を受けることを考慮して頂けたらと思います。

コロナ禍で変わったこと

2020年4月7日に発令された緊急事態宣言により大学もいろいろなことが変化しました。まず学生の授業はすべてリモート授業になりました。しかし、歯科大学では実習が欠かせません。そこで、密を避けるために学生を2グループに分け、授業と実習を半々ずつ行うこととなりました。研修医の講義や症例カンファレンスもZOOMにより行われ、行動制限も未だ解除されず、歓送迎会、医局旅行、忘年会などの医局行事も復活しておりません。

病院も2か月間休診となり、急患対応のみとなりました。皆様方の中にはコロナのために歯科医院の受診を控えた方もいらっしゃると思いますので、歯科大病院(歯科医院)のコロナ対応について少し述べたいと思います。歯科領域での感染症対策は、HIV対策にさかばりります(肝炎対策も同様です)。無申告

の患者さんが受診しても院内感染が広がらないように対策を講じています。口腔内に入る歯科用器材の滅菌は勿論ですが、歯を削るエアータービン(切削器具)も患者さん一人に使用したら必ず滅菌します。さらにコロナに関してですが、患者さんに問診、検温、イソジンでのうがいをお願いしています。歯を削る治療の際には、術者の自己防衛策として、マスクおよびフェイスシールド、ゴム手袋、帽子、防護服を着用します。エアロゾル感染防止のために、歯を削ったり歯石をとる際には口腔外バキュームで飛沫したものを吸引します。そして一人の患者さんの診療後には、診療用椅子、照明器具、器具を置く台等はすべてアルコール清拭を行います。また、強力な空気清浄機を設置したり、1時間に1回の換気を励行します。このような対策のおかげで、歯科医院でのクラスター発生は報告されておられません。口腔内の衛生状況が向上しますと自己免疫力もアップするので、定期的な歯科医院の受診をお勧めします。

学会関連では、3年間集合型(対面)での学会は開催されず、ハイブリッド開催(現地開催と当日配信)および後日アーカイブ配信が主流となりました。学会場に行かずに好きな時間に発表を聞くことができるという利点はありますが、現地で友人たちと討論や情報交換ができないのは残念なことで、早くコロナ禍が収束してくれるのを願うばかりです。最後になります。母校に感謝するとともに、母校ならびに東進会がますます発展することを祈念申し上げます。

第14回アカンサスクラブ講演録

『言葉は人や社会に対して

何ができるのか』

千葉 ともこ(平成9年卒)



(撮影：大泉 美佳)

●ご挨拶

皆さま、こんにちは。

わたしは、一九九七年(平成九年)三月卒の卒業生で、今は「千葉ともこ」という筆名で小説を書く仕事をしております。

今回の原稿は、先日九月一日開催のアカンサスクラブでの講演を中心にとのご依頼でしたので、レポートのような形で綴ってまいりたいと思います。

そもそもの講演ですが、内容はお任せとのご依頼でしたので、テーマは最近自分が問題意識を持っていることを中心に最後に少しだけ読書会形式を取り入れる試みをいたしました。

改めて自分の考えを深めることができ、

ご参加いただいた皆さまに感謝申し上げます。

●自己紹介

まずは、自己紹介を。

土浦一高を卒業後、筑波大学を二〇〇一年三月に卒業しております。

大学在学時は、演劇サークルに所属していた、卒業後もそちらの道に進みかけたのですが、当時は就職氷河期真っただ中で、劇団も研修生の募集を絞っておりました。

それで、小説ならば、ひとりで役者も音響も照明もできると思って、小説教室に通い始めたのです。生活をしていくために働かねばならず、どうせなら人の役に立つ仕事がいいと茨城県庁に入庁いたしました。働きながら小説を書き、二〇二〇年に松本清張賞を受賞して、作家デビューいたしました。

一年ほど公務員と作家を兼業して、この二〇二二年三月に、二〇年勤めた茨城県庁を退職、四月からは専業作家となりました。五月に二作目の単行本『戴天』を上梓し、七月に同作で日本歴史時代作家協会新人賞を受賞いたしました。

●言葉を奪われた子どもたち

講演では、まず、従来から問題視されている子どもたちの国語力の低下について、お話をいたしました。

わたしがこの問題に興味を持ったのは、専業作家になり、我が子の勉強を見るようになって、驚愕したからです。それまで親がさほど手をかけなくても平均点く

らいは取っていたのですが、個別に見ていくと、特に国語の読解力が深刻な状態だったのです。

これは親子の問題でもあり、子どもも読者に持つ小説家としての問題でもあります。ここから、原因探求の旅が始まりました。

最初は本を読まないから、読解や表現が苦手なのかなと思っていました。でもこれは大きな誤解で実は小学校の図書室で借りて、それなりに本を読んでいた。

なぜ読解力など言葉に関する部分だけ極端に点数が低いのか――。

結論を先に申し上げますと、子ども本人には問題はなく、周囲にいる大人の言葉の問題ではないかということにたどり着いたのです。

きっかけとなったのは、親子の会話のなかで、ウクライナへの侵略の話が出たことでした。なぜ戦争はいけないのか。そう子どもから問われて、これは適当な言葉でごまかしてはいけない。自分の考えをちゃんと伝える必要があると思い、丁寧に言葉を尽くしました。

すると、子が「実は、まさにそのことなんだ」とこれまで話したことのない、ある習い事を止めた理由を語りだしたのです。子がこれほど深い思考を持ち、それを言葉で表現できるということに驚きを感じました。

それだけではなく、これまで保育所や学校で受けた理不尽なことなど、あふれるように言葉を継いできたのです。同じときを過こしてきたはずなのに、まった

く知らない世界の話を聞いているようでした。

学校での理不尽などそんな大事なことを、なぜこれまで抱えていたのかと理由を訊くと、「お母さんは保育所や学校に言ってくれるのは分かっていたけど、たぶん変わらないから」と教えてくれました。以上のことから、少なくとも二点気づいたことがあります。

ひとつはちゃんと大人が自分の言葉で語り掛けてこなかったのではないかといいことです。

ヘレンケラーがサリバン先生から「水」という言葉を教えてもらって、冷たい液体を認識し、次第に世界を知っていったように、感情についても、なるべく正確な言葉を使うように大人が心がければ、子どもはその内面を自由自在に表すことができるのではないかと。

毎日の会話で、お互い仕事や学校のことをたくさん話してきましたが、親のほうでどこか子どもには難しく分らないだろうと、自分の言葉で語ることをさぼってきたのではないかと思つたのです。もうひとつは、言っても変わらないと子どもに思わせていたこと。これは言葉で説明するのではなく、実感してもらわないと子どもには分からないと思つていきます。

子どもの言葉が乏しいのは、子どものせいではない。子どもから言葉を奪っていたのは大人ではないか――。

そんな考えを持ったとき、ちょうど石井光太さんが『ルポ 誰が国語力を殺すのか』を上梓されました。出版社はわた

しのデビュー版元である文藝春秋で、同社の『オール讀物』という雑誌主催で、同著に関連したオンラインイベントも行われました。すべて拝読、拝聴してまさに自分が思っていたことの確信を得たように思います。

子どもから言葉を奪ってはいけない。なぜなら、言葉は生きていくためのすべての能力の根底にある力だからです。

●実のない言葉を使う嘘つきな大人たち

それでは、子どもたちに言葉という栄養を与える大人たちはいったいどんな言葉を使っているのでしょうか。

子どもは実際に耳にし、目にした言葉を真似して吸収することで、言葉を自分のものにしていきます。

必ずしも高尚であったり詩的である必要はなく、問題はその言葉がちゃんとその人の言葉であるか、活きた言葉であるかが重要だと思っています。

しかし、実際はなかなか難しい。たとえば、大人は息を吐くように嘘をついたりします。

公務員として、人事の独立機関に向向していたとき、ある教育委員会の先生から相談を受けたことがあります。

「自分のたちにとって都合の悪い大きなトラブルが起きた。本当はどういうことだったことにしたらよいと思うか」

最初は相手が何を言っているのか分かりませんでした。

次第に、どうしたらきれいな嘘をつけるかという偽造と隠への相談なのだとは分かった、相手は年上の偉い方でしたが、

こんこんと説教をしました。

これは極端な一例で、ほとんどの方が真摯に公務に取り組んでいるものと思いますが、許しがたいことが現実には起きているわけです。

表現力という意味でも、大人が豊かな言葉を子どもに注いでいるかという大きな疑問があります。

たとえば、先にご紹介をしました石井光太さんの著書で紹介のあった事例で、学校の授業でICT(情報通信技術)を使って何をしているかというところ、

『国破れて山河あり……』の光景をイメージさせる画像を見せて「これが漢詩に書いてある光景だ」と教えているのさうです。

この教え方に、強い抵抗を覚えるのはわたしだけではないと思います。百人の読者がいれば、百とおりの光景が見えるはず。

今わたしは、新潮社の文芸雑誌『小説新潮』で、杜甫が八人の酒豪を詩にした『飲中八仙歌』をモチーフに連作短編を書いているのですが、最後の九話目は「国破れて山河あり」というタイトルでまさに『春望』の世界を描く予定です。

生徒に画像を見せて漢詩を教えているという件を読んで、わたしは読者によって見え方の変わる『国破れて山河あり』の光景をお届けするぞと心に決めています。

●言葉は人や社会に対して何ができるのか

講演では最後のまとめとして、言葉や

文芸、広義の学問は、人や社会に対して、いったい何ができるのかというお話をしました。

人に対しては、まさに講演の前半で話したとおり、「生きる力」の根底にあるのが言葉の力だと思っています。

そして、社会に対してですが、文芸を含む広義の学問は、うまくいっているように見えても、ほんとうにそうなのかと常に疑問を投げかけていくことに、その本質や使命があると思っています。

令和四年の今、皆さんと私は同じ時代を共有しているわけですが、五十年後、百年後に、今の時代はどのように評価されるのでしょうか。

自分が土浦一高を卒業してからの四半世紀は、東日本大震災、コロナ禍等々と国難級の非常事態が続いております。

残念ながら、そんな状況下にあつて、政治も経済も明らか問題が存在しているのに、問題がないことにされてしまっていたりします。致命傷を抱えているのに、治療せず、騙し騙し過ごしてきたようなものです。

わたしは時代小説家ではありますが、賞の選評や書評で現代の社会問題を過去の小説世界に投影する作家だといわれることがあります。そもそも時代小説とはそういうものだと思うのですが、令和の作家のひとりとして、現代の社会や人のあり方に敏感でありたいと思っています。

最後に。今年五月に上梓しましたデビュー12作目の単行本『戴天』は、現代にも通じる人の宿痾「支配と服従」の関係を

描こうと試みた意欲作です。おかげさまで、新聞や雑誌など各メディアに取り上げていただき、日本歴史時代作家協会新人賞をいただくこととなりました。もしご興味がありましたら、お手に取っていただければ幸いです



リレー放談 第14回

『SYOの道』

梅澤 熙子 (昭和40年卒)

「へたな人ほど、面白い字を書くものですよ」20数年前、母が出品した書展を見に行き、出品された作品に圧倒されながら「こんな作品が書いてみたいけれど、字が下手だから無理だわね」と母と話した事を耳にした、主催者であるつくば市在住の書家松川昌弘先生の言葉でした。師の作品と人柄に魅せられ、「エイヤ」とこの道に入り、現在は東京書作展審査委員として、隅の方に座らせていただいています。

漢字は、5〜6世紀頃、中国の隋の時代に仏教と共に日本に伝わりました。聖武天皇の天平年間には、仏教文化の最盛期で、写経などが盛んに行われ、飛鳥時代の聖徳太子の書とされる法華義疏や聖武天皇妃の光明皇后が臨書（手本を見て真似て書くこと）された「楽毅論」等も奈良正倉院に保管され、現在でも見る事ができます。聖徳太子の法華義疏は、三経義疏の一つで、拝見すると丸みを帯びた優しい文字で十七条憲法や冠位十二階の制定など政治的に力を発揮された方ですが、書からは親しみやすい、ユーモアのある方だったのでは？と勝手に推測しています。光明皇后の手の「楽毅論」は、348年に書聖と言われた王羲之の書いた書を、約300年後の744年に皇后44歳の時の時、臨書された作品で、男性的な力強さを感じさせる書体で書かれています。1450年後の現在、私が皇后の「楽毅論」の一部を臨書させていただいています。女性でありながら、積極的に社会活動を行い、悲田院施薬院を設立し、福祉活動に力を入られた皇后にふさわしく、力強く、おおらかな書体で書かれています。

天平の時代に、夫の聖武天皇を支え、慈善活動に力を発揮し、決して宮中の奥深くおとなしく生活していなかったであろう美しい皇后に、現代女性に通じる物が感じられ、親しみさえも覚えます。1400年以上も前の歴史上の人物によって書かれた書が現存し、私達も目にし、学べる事は、不思議な繋がりタイムス



【風】 2016年東京書作展審査会員初出品作品

良寛の書の有名な「天上大風」や、誰にでも読める書を求められて書いた「いろは」「二二三」など、一見すると頼りなげで誰にでも書けそうにみえます。NHKの美の壺の中で、「天上大風」を評して、書家の石飛博光さんは「良寛さんのあれを書いちゃったら、あの先が見えてこないのね。究極のすべてを削ぎ落していつ

たら、きつとああいう字が残るのかな」と。そうゆう文字の存在として私は、良寛さんの文字を大事にとつてあるわけです。だから習わないの」と。

夏目漱石も、良寛に心酔した一人で、良寛の書を執念で手に入れ、そのお返しに自分の書を求められ、こういったそうです。「良寛を得る喜びに比ぶれば、悪筆で恥をさらす位はいくらでも辛抱つかまつる」と言っているくらいです。良寛の書は、かな文字のもつ美しさを、漢字を書く際にも生かそうとし、日本的な柔らかな線の細みと軽みを実現したといわれています。私は、単純に、鑑賞するものが力を抜いて、素のままになり、ほっとさせてくれる書だと感じています。

また、相田みつをさんの書も、分かりやすく、独特の書体で書いた作品で知られ誰でも一度は、目にしている書家です。前衛的な書風で知られる、榊原山の京都嵯峨野の寂庵の「寂」、東大寺の「世界遺産東大寺」なども身近にみられる作品です。その他、お酒のラベル、大河ドラマの大事などよく見ると著名な書家が書いた物もたくさんあります。生活の中で、ちよつと気になる書をみつけたら、スルーせずに鑑賞してみると、新たな発見があるかもしれません。

今回はジャーナリストとして、現在もご活躍中の坂本 栄さんをご紹介いたします。沢山の引き出しの中から、興味深いお話が伺えると思います。

（編集後記）
今号はアカンサスクラブで講演していたいただいた、作家の千葉ともこさんに講演録を中心に「ご執筆いただきました。土浦一高の後輩の活躍を大変うれしく思っております。今後も各界で活躍の方々のお話を聞かせていただきたく、アカンサスクラブ講演会を楽しみにしています。

今はまだコロナ禍の影響でオンラインでの講演会ですが、近いうちに対面とライブのハイブリッド形式で開催できることを願っています。講演会後の懇親会も待ち遠しいです。皆様それまでお元気でお過ごしください。

☆



左から2番目が筆者